

アルミニウスとウェスレー ——救済論的系譜

藤本 満

序 アルミニウスとウェスレーの接点

「アルミニウスをウェスレー神学の決定的なリソースの一つとしてみなすことは、現実的ではないだろう」——これは、ウェスレー神学と本格的に取り組み、その背景にある様々な神学的・思想的潮流を理解しようとした、ウェスレー研究の大家A・アウトラーの言葉である¹。

実際ウェスレーの生涯において、アルミニウスはどのように登場するのだろうか。1731年、まだオックスフォードの研究者であった時代、ウェスレーは教会史の重要資料の要約版を掲載した書物、ベネット (Thomas Bennet) による *Directions for Studying* を読み、アルミニウスの予定論についての見解に触れている。しかし、それが特別な影響をウェスレーに与えたという形跡はない。1739年、野外に数千名を集めて信仰復興運動が始まったばかりのことである²。聴衆は炭坑夫を主体としていたにもかかわらず

¹ Albert Outler, ed. *John Wesley* (NY: Oxford University Press, 1964), p.23.

² ホイトフィールドは、オックスフォードの神聖クラブでウェスレーの後輩に当たるが、ウェスレーがアメリカのジョージアに宣教に行ったことに刺激され、彼も渡米する。そのとき、ニューイングランドのジョナサン・エドワーズの影響を受け、彼は二重予定説を信奉するようになる。ウェスレーよりも早く福音的回心を遂げたホイトフィールドは、各地で信仰義認を説教するもの、道徳主義にそまった英国教会は彼に門を閉ざし、やむなく野外で説教を始

わらず、聴衆は予定論を前提としていないウェスレーと、それを前提としていたホイットフィールドとの違いに疑問をいだき、論争が巻き起こった。結果、ウェスレーはやむをえず1740年に説教128「自由の恵み」(Free Grace)を出版した。そこにもアルミニウスの名前は出てこない。1752年に、「予定論を冷静に考察する」(*Predestination Calmly Considered*)の中でも、「カルヴァン」「ドルト会議に招集された神学者たち」との言及、あるいは全般的な意味での「アルミニウス主義者」とあるが、アルミニウス自身への言及はない。

すると、ウェスレーの予定論は、どのようなものであったのだろうか。ピューリタン革命が失敗に終わり、王政復古と共に国教会が支配権を取り戻してからは、全体として改革派的予定論を敬遠するようになっていた³。アルミニウスの名前を出すまでもなく、英国教会全体で予定論についての方向性は出ていた。

それは

- ①だれでも信じる者は救われる。
- ②だれでも信じない者は救われない。
- ③だれがどちらに属するかは、神が予知において知っておられることであり、神は個人々人をどちらかに定めているのではない。

もちろんウェスレーの予定論には、独特な輝きがある。それについては、本稿・IIで論じることとする。しかし、18世紀英国教会の予定論の見解は、アルミニウスを引き合いにださずとも、「予知における予定論」が一般的であった⁴。

めた。再度アメリカを訪れることを願っていた彼は、ブリストルでの野外説教の働きを先輩ウェスレーに託すことを決意した。

³ T.M. Parker, "Arminianism and Laudianism in Seventeenth-Century England," *Studies in Church History*, ed., by C.W. Guggmore and Charles Guggan (London: Thomas Nelson, 1964), pp.20-34.

⁴ アルミニウス主義は、別の側面で浸透していった。それは寛容論においてである。1613年に国際法と寛容論で有名なヒューゴ・グローティウスが英国を訪れ、国教会司教たちと会談を持っている。彼はアルミニウス主義代表していたオルデンパルネフェルト(ホラント州の法律顧問)のもとで政治のキャリアを積み、アルミニウス主義を代表する一人となる。ドルト会議へとイングランド王ジェームズI世によって派遣された神学者8名は、必ずしもアルミニウスに賛同する傾向にはいなかった。しかし、会議においてアルミニウス主義が糾弾

さて、本稿は、ウェスレーはアルミニウスに学んだ可能性は文献的にはない、ということを確認した上で、以下のことを明らかにしてみたい。

- ① 両者の接点が密着したものではなかったにもかかわらず、両者の救済論は同種の流れの中にあること、すなわち、改革派神学における予定論に異議を唱えたアルミニウスと、それから150～200年後の英国で信仰復興運動を率いたウェスレーとは同じ救済論の系譜に位置づけられること。
- ② ウェスレーによる予定論が、神の予知による予定論ではあったが、独特の輝きを放つようになること。それが、どのようなものであったのか。
- ③ 1770年にウェスレーがホイットフィールドの葬儀の説教をロンドンで行い、それを発端として予定論争が本格化し、ウェスレーのメソジストとカルヴァン派のメソジストとの対立構造が生まれてしまった。その論争が拡大していく中で、ウェスレーアン・アルミニアン神学なるものが生まれていくこと。それが19世紀のメソジスト神学にどのような変容を生み出していくのか。

I. 救済論の系譜：神の働きに対する「人間の応答性」

アルミニウスは「神の像」として創造された人間には、理解力や感情、そして意志（自由）という下層部に加えて、超自然的、霊的な上層部があると理解していた⁵。

され、その後のきびしい扱いを見るにつけ、アルミニウス寄りになる。イングランドにおいては、ケンブリッジ・プラトン主義派という広教派

(Latitudinarians) がアルミニウス主義の寛容論を代表することになる。アルミニウス主義にとって、寛容論は必ずしも予定論の周辺議論ではない。同じ改革派神学の中にあっても、予定論の理解に違いがあっても、それを寛容を求める願いをアルミニウスは常に主張していたからである。詳しくは、W. Stephen Gunter, *The Loss of Arminius in Wesleyan-Arminian Theology*, "Reconsidering Arminius" (Kingswood Books, 2014), 78-79. T. M. Parker, "Arminianism and Laudianism in Seventeenth-Century England," *Studies in Church History*, edited by C.W. Dugmore and Charles Duggan (London: Thomas Nelson, 1946), p.20-34.

⁵ Arminius, "Certain Articles," VI, v, in *The Writings of James Arminius*, 3 vols., trans. James Nicholas and W.R. Bagnall (1977), 2:486.

聖書によれば、神の像に創造されたアダムは自由意志によって生きていて、そこに外からの強制力が働いていたとは考えられない。アダムは神の命に従うか背くかを選択する力があり、結果アダムは、サタンの誘惑の前に「自らの自由意志によって、神より許された自らの動機を働かせて」⁶ 背く方向を決断した。墮落により創造時の義と聖は失われ、神との交わりから墮ち、楽園を追放されることになる。アルミニウスは、アダムの罪が個人的であると同時に人類の問題として理解していた。こうして神の像は損なわれ、人は「原罪」の中を生きることになる⁷。

では、全的に墮落し、悪を指向する傾向にある人の意志に対して、神はどのような働きかけをなさるのであるだろうか。アルミニウスはアムステルダム牧師であったときからライデン大学で教鞭を執るにいたるまで、この問題と一貫して格闘してきた。そして彼が導き出した考え方が、神の呼びかけ (*vocatio*) であった。

キリストにあって神の恵みの働きがある。その働きは神の御言葉と聖霊を通して人の魂に臨み、裁きへと歩を進めつつ罪の支配下に置かれている罪深い……人間をイエス・キリストにある交わりへと呼び出す⁸。

当然、この論における核心的課題は、人は神の呼び出す声に「抗することができるか？」である。「この点に関して、聖書によれば、私は多くの人が聖霊の招きに抗して、差し出されている恵みを拒絶すると信じている」⁹ とアルミニウスは記している。救いへと呼び出す神の働きかけを拒むとき、そこに働いているのは「頑なな心」である。神の呼びかけを退ける時、聖霊はその人のもとを去る。そして、神は御自身の呼びかけを拒む人をさらに深い罪の世界へと「引き渡す」(ロマ 1:24) ことになる¹⁰。しかし、もし人が神の声に振り向くなら、聖霊はその人に個人的・直接的に働きかけ、神の力がその人のうちに注がれる。聖霊は人の「心に良き思いを、感情に良き願いを、意志には良き思いと願いを実行に移す力を与える」¹¹。

⁶ “Private Disputations,” XXX, vi, in *Writings*, 2:75.

⁷ *Ibid.*, VIII, xiii, in *Writings*, :492.

⁸ “Public Disputations,” XVI, ii, 1:570.

⁹ “Declaration,” in *Writings*, 1:254.

¹⁰ “Public Disputations,” XVI, xiv, in *Writings*, 1:574.

¹¹ “Letter to Hippolytus,” IV, in *Writings*, 2:472.

オランダのアルミニウスから150～200年後、イギリスのウェスレーが同じ路線で「人の救い」を考えていた。人は神の像に創造されたとウェスレーが言うとき、道徳性を帯びた人格にとって「自由」は本質的な要素であると考えた。

神は人をご自身の像に、つまりご自身のような霊的存在として、理解力を与えられ、意志と感情と自由を備えられた霊的存在として造られた。この自由がなかったら、人間に与えられた理解も感情も意味をなさない。自由なくして、美德も悪徳もない。自由があるからこそ、人は木や石と違って道徳的な存在である。人が草木と同じように自由がないなら、神の摂理の力が及んでも、人の行いが倫理的に善であるとも言えないし、悪であるとも言えない。自由が奪われたとき、人間は道徳的存在意義を失い、石と同じになってしまう¹²。

ウェスレーはアルミニウスと同じように、救いが神の像の回復を意味していると考えていた。そして彼も、人間の全的墮落を強調している。メソジストの宗教復興運動が始まってしばらくした1744年、各地を巡回する説教者たちを集めた初めての年会での学びで、原罪の教理を討議した。

問15 アダムの子は、いかなる意味において人類すべてに混入されているのか。

答 アダムにおいてすべての者が死んだ。(1)我々の肉体が死ぬべきものとなった。(2)我々の魂も死んでしまった。すなわち、神から分離した。それ故、(3)我々は罪深い・悪魔のような性質を持って生まれている。この理由により、(4)人は皆、「御怒りを受けるべき子どもであり」、永遠の死を免れ得ない(ロマ5:18; エペソ2:3)。

ここに、神の恵みの感化を受ける以前の自然的状態にある人間(natural man)は、善を自由に選び取ることもそれを実行することも不可能であるということを読む。ウェスレーの一徹な姿を見る。

そのような人間に神の救いの働きは、一方的に圧倒的に及んでくる。

信仰と救いの創始者は、神おひとりである。私たちの内に働いて、志を立てさせ、事を行なわせてくださるのは、神である。神こそは、すべての祝福の唯

¹² 説教67「神の摂理について」、15

一の贈り主であり、すべての良き業の唯一の創始者である。人間の内には功績はもちろん、実行する力さえない。すべての功績は、神の御子の内にあり……すべての力は神の霊の内にある……救いのすべての働きは……まったくもって神の御霊の働きかけによる¹³。

父なる神の愛と子なる神のすべての功績を人間に伝授するのは、聖霊であり、救いはあらゆる段階において、聖霊の主導権をもとに展開していく、神の働きである。

しかし救いの目的が、人に「神の像」を回復して、主体的自由を宿した「人格」の完成を目標としている限り、聖霊は人の意志を無視して不可抗的に人を支配することはない。聖霊は一つの人格を引き寄せ、語りかけ、導きながら働きかけてくる。その時、神の働きかけは「先行的」(prevenient)、あるいは「主導的」(act)であるという。神が先行・主導し、人はそれに応答(re-act)しつつ、神の働きは進んでいく。

聖霊の働きは強制的でなく先行的であり、人には聖霊の主導に応じるという神の働きへの「協調性」(concurus)が求められる。聖霊の主導がなければ人間は絶対に自分の方から働き出すことができない。しかし同時に言えることは、神の働きかけ(action)は、人間の応答(re-action)を求めている。

人の応答は、聖霊の語りかけによって「罪を自覚する」ことから始まる。次に聖霊は、人が罪に抗しようと思っても、勝つことができない「無力さ」を教えてくれる。最善の善行をもってしても、最も小さな罪を贖うこともできない。この「絶望」から、次に聖霊は神の憐れみ・十字架の贖いを慕う「信頼」を与えてくださる。呼びかけ引き寄せる聖霊の声に心を閉ざすことなく開いていくとき、人は聖霊の主導に応答することになる。やがて聖霊の働きかけに身を投げ込み、感謝や讃美をもって神の主導に応え、与えられた賜物を生かすことを学ぶ。

この「神の働きかけ(action)／人の応答(reaction)」の中で、救いの「全体」が展開されていく。もし私たちがその声に応じるなら、この願望はますます増大していく(説教43「聖書における救いの道」一・1-2)。神への目覚めから始まって、やがて悔い改め、義認、新生、聖化へと救いが実現していく過程は、「神の恵みによって、人々の魂の中に神のいのちが生まれ(begot)、保たれ(preserve)、増大していく

¹³ 『さらなる訴え』、part I、i、6

(increase)」過程である¹⁴。

神の働きにおける人の応答性を考えているウェスレーは、神の働きが不可抗的に人に臨むとは考えていない。もしに「魂が応対(re-act)しなければ、神の方での働きかけ(act)は続くことはない。……もし私たちが、神の声に耳を傾けず、神から目を反らし、神が注いでくださる光を心に留めないのなら、聖霊はいつまでも孤軍奮闘するとは限らない。聖霊は徐々に退いてしまうであろう」¹⁵。

また、ウェスレーは説教 85 「自分の救いを達成すること」(三・7)において、救いはあくまで、神との人格的な交わりの中で達成されていくことをウェスレーは二つの点から強調している。第一に、「いまあなたのうちに与えられている恵みの灯火を燃え立たせなさい。そうすれば神はさらに恵みをくださいます」(三・5)。つまり、神の主導への人の応答が、さらに強い神の働きかけを引き出すことになる。第二に、「神があなたのうちで働いておられるのだから、あなたも働き出しなさい」(三・6)と、救いは神の招きであって、神が私たちを御自身の働きの中へと呼び出してくださっていることを強調している。

彼は、この説教でアウグスティヌスの以下の言葉を引用している。「*Qui fecit nos sine nobis, non salvabit nos sine nobis*」(私たちなくして私たちを創造された神は、私たちなくして私たちを救うことはない)¹⁶。「あなたも働き出しなさい。なぜなら神があなたのうちで働いておられるのだから」(三・6)。与えられた信仰は、愛のうちに働き出る(エネルゲオー)(ガラテヤ 5:6)¹⁷。しかし、働き出たとしても——つまり、私たちが信仰の道を勇敢に走り抜いたとしても、狭い門から苦闘しながら入ろうとしたとしても、自分を捨てて日々自分の十字架を負って従っていったとしても——

¹⁴ 手紙、to Samuel Walker, 1756.9.3

¹⁵ ウェスレー、説教 19 「神より生まれた者の偉大な特権」三・3。

¹⁶ アウグスティヌス、説教 169, xi, 13

¹⁷ 信仰は愛のうちに働きでる性質をもっている。またそのように働きでる信仰は、強くなっていく。この信仰と行いのダイナミックスについて、詳しくは拙著『ウェスレーの神学』(福音文書刊行会、1991)「愛によって働く信仰」221～226 頁/Kindle 電子版 237～242 頁。

それはすべて自らの力によるのではない。信仰者の働きはあくまで聖霊の呼びかけに対する人の応答である。

II. ウェスレーの予定論

改革派的二重予定論に反駁するウェスレーばかり考えていると、独特な輝きを放つウェスレーなりの予定論を見逃すことになってしまう。そこで本項では簡単ではあるが彼の予定論をまとめてみる。ウェスレーはアルミニウスと同じように予定論を圧倒的な「神の摂理と統治」のもとに位置づけて考えている。神は無から有を創造され、その世界は巧妙に見事に保たれている。

神はこの世に存在する事物や出来事が互いにどのような関係・依存・連結にあり、影響して合っているかを知っておられる。上の天でも下の地にあっても、被造物を見ている。……そして様々な鉱物や植物が人の子らにどのような影響を与えているのか。これらすべてのことは宇宙の創造者であり、保持者である神の目には明らかである（説教 67 「神の摂理」、11）。

だが、ウェスレーは神の摂理を、神の主権ではなく、神の愛と結びつける。

私たちは神の子どもです。母が子どもを、胎の子たちを忘れることができようか。この世の母親たちにはありえても、神が私たちを忘れることなどない。神ご自身が明確に宣言されたように、その目は地をみそなわし、神の愛はすべての子らに、神の憐れみは神のすべての働きの上に及ぶ」（詩篇 34:15, 83:18, 145:9 / 同説教 13）。

たとえ神の摂理とは思えないような世界の出来事、また人生の出来事があつたとしても、それでも神の愛を信じる。なぜなら「神がそのように言われたのなら、それを信じなければならない」（同）と述べている。ウェスレーにとって、神は王である主権者である以上に、親のような愛情と配慮を持って子どもたちを配慮する。そして子どもたちは絶大な信頼をもって神の御手の中で生きることを学んでいく¹⁸。

¹⁸ アルミニウスもまた、神を主権者である以上に、愛ある親として見ている。この視点がジュネーブでテオドル・ベザのもとで学んだアルミニウスをベザとは違う方向で改革派神学を考えた根源にあると言われる。Richard Muller, *God, Creation, and Providence in the Thoughts of Jacob Arminius* (1991),

親が子どもを愛するように、神は人を愛の通じる人格として創造され、かつ愛が行き巡る人格的關係を保とうとされるとき、神は一つの制限を御自身にかけることになる。「神の摂理の全体的枠組みは、人が悪から遠のき、善を行うために可能な限りの助けを提供しつつも、その助けに左右されすぎて人が一つの機械に墮してしまふことのないように、調整されている」(説教 67・15)。

さて、ウェスレーが実際に予定論を論じるとき、そこにはいつもアルミニウスを弾劾した二重予定説を論駁する意図が鋭く表面化する。しかし、だからと言ってウェスレーは反予定論者ではない。彼なりの予定論がある。それはどのようなものなのだろう。特徴的な三点を挙げておきたい。

1. ウェスレーの予定論は、二重である。

神は地の基が据えられる前に、救いについて定めておられる。その定めによって人は、救いか滅びか、その二つの道のどちらかを行くことになる。ウェスレーは滅びの道を曖昧にしないという点で、ウェスレー神学における神の定めは「二重」になっている。

神の定めは、はるか昔、地の土台が据えられる前のことです。でもそれは、どのような定めなのだろう。「わたしは人の子らの前に、生と死、祝福と呪いを置く」(申命記 20:19 参)。生を選ぶ者は生き、死を選ぶ者は死ぬ。この定めは永遠から決められたもので、神はこれによって「前もって知っておられた者たちを……定められる」(ロマ 8:29)。つまり、キリストを信じて生きる者は、「神の予知に従い、選ばれた人びと」(1ペテロ 1:2) です。……この誓いには神ご自身の存在が込められていて、不変で永遠です」(説教 110「自由の恵み」、29)。

そして神は、私たちがどちらの道を選ぶことになるのかを予知しているが、それを定めてはいない。定められたのは信仰と不信仰、従順と不従順という二つの道、それに基づく二つの結果、である。

2. ウェスレーの予定論は、人間の主体性を排除しない。

自分がどちらのグループに属するかについて、神は私たちの選択を予知しておら

れるが、それを決めるのはキリストに現れた神の憐れみを受け入れるか拒絶するか、私たちの「協調性」(concurus)にかかっている。

改革派の二重予定説の標準的な見解を端的にまとめれば、次のようになる。歴史の始まる以前、永遠の中で神はある人びとを救いに定め、ある人びとを滅びに定められた。神は時の中で、救いに選ばれた人にだけ先行的な恵み、義とする恵み、聖化の恵みを与えて、この定めを実行される。他の者にはこうした恵みは与えられず、罪の中に取り残され、滅びに至る。

本稿・I項で記したように、ウェスレーは、全的に罪の中に生きている者を呼び出し・自分の罪を自覚させ・悔い改め・神の憐れみへと近づかせる「先行的な恵み」は、小さな灯火としてすべての人に与えられていると考えた。悔い改めて、救いの道を選ぶ可能性は、この恵みの故にすべての人にある。

その意味で、救いの働きは、人の応答を待っている。ウェスレーの予定論を丁寧論じているW・エイブラハムは次のように述べる。「神は確かに定める主権を持つておられる。だが、それは人の側の主体的人格や自由を排除することはない。いや、人がその自由を行使することは、神の定めの中に組み込まれている」¹⁹。

3. ウェスレーの予定論は、救いの完成を目指している

すべての人が神によって創造された。聖霊の呼びかけはすべての人に、つまり宗教的関心も素養もなく、おごり高ぶって生きて来た者にも、社会の底辺で生まれ、教会とは縁もなく、讃美歌も教会の祈りも知らなかった炭坑夫たちにも、人のいのちを食物に生きてきた当時の奴隷売買に関わってきた人にも(ジョン・ニュートンがそうであった)、救いの門戸は開かれている。聖霊はひとしく「先行の恵み」によって呼びかけ、十字架の贖いのものとへ引き寄せることができる。

いかなる人も、もし神の主導に応答し、救いの列車に乗り込むのなら(信仰、救いの列車は、試練や誘惑がどれほど激しいものであったとしても、力強く私たちを神の栄光の世界へと連れ上ることができる。「この定めがあるからこそ、私たちは励まされて善き業に、ホーリネスに富む者とされる。そしてこの定めこそが、喜びと幸福、そして大いなる終わりのない慰めとの泉なのである」と(説教 110「自由の恵み」、

¹⁹ ウィリアム・エイブラハム『初めてのウェスレー』訳・藤本満(教文館、2013)、216頁。

29)。

「鏡のように主の栄光を映しつつ、栄光から栄光へと、主と同じかたちに姿を変えられていきます」(IIコリント 3:18)、「神は.....さらに召し、.....さらに義と認め.....さらに栄光をお与えになりました」(ロマ 8:)、「私たちは神の作品であって、良い行いをするためにキリスト・イエスにあって作られたのです.....その良い行いをあらかじめ備えてくださいました」(エペソ 2:10) というような聖句を、ウェスレーは頻繁に用いる。そのことによって、神が定められた救いの道が豊かな恵みの備えにあふれ、列車は同じところにとどまっているのではなく、限りなく上昇していくことをウェスレーは強調する。それが上昇的聖化論を主体としたウェスレー神学の特徴である²⁰。

良き働きを始められた神が、それを完成へと導くとしたら(ピリピ 1:6)、神は私たちの「うちに働いて志を立てさせ、事を行わせてくださる」(2:13)。だが同時に、私たちは「従順であり」(2:12)、「すべてのことを、不平を言わずに、疑わずに行い」(2:14)、「恐れおののいて自分の救いを達成するよう努める」(2:12) ことが求められている。神は恵みの手段(祈り・聖書・礼拝・聖餐・教会・愛の実践)を万全に備えて、信仰者が神の働きに沿う道筋・手段を与えておられる。この手段を「用いる」こと、つまり、神の働きに「協調」(concurus)して始めて、神の救いの働きは完成へと向かうことができる。

結びにかえて——論争の渦の中で

ウェスレーがアルミニウスを学んだという形跡はほとんどないが、1770年代にあって事態は変わった。それは、カルヴァン派メソジストの指導者であった、ホイットフィールドの死がきっかけであった²¹。1770年9月30日ボストン近郊の町で、ホ

²⁰ 拙著『ウェスレーの神学』、304～308頁(Kindle電子版332～337)。

²¹ 18世紀英国の信仰復興運動は、1739年のブリストルの野外説教に始まったと言っても過言ではない。野外説教は、ウェスレーの後輩ホイットフィールド

イトフィールドは56年の生涯を閉じた。葬儀はアメリカで行い、追悼集会がロンドンで行うとの遺言が残されていて、ホイットフィールドは追悼説教をウェスレーに依頼していた。この説教は説教53「ジョージ・ホイットフィールド氏の死に際して」と出版され、私たちも読むことができる。

ウェスレーはこの説教の中で、ホイットフィールドと自分は、人の全的罪深さ、キリストの全的功績、信仰義認、新生、聖化といった主要な聖書の教えにおいて一致していたこと。しかし、非本質的な性格を帯びた教理においては「一致しないことに一致する」(agree to disagree)を共に学んだことを明らかにした(説教53・三・1)。ところが、改革派の選びの教理が「非本質的な性質を帯びた多くの教理」という範疇に入れられたことは、信仰復興運動のカルヴァン主義の人々の逆鱗に触れた。そうして大論争が展開されていく。カルヴァン派はウェスレーを「アルミニウス主義者」と揶揄し、*The Gospel Magazine*と銘打った機関紙の発行を開始し、かたやウェスレーは揶揄された名称を逆手にとってメソジストの月刊誌*The Arminian Magazine*と(1778～1797年)を発行した。

ここでメソジストにとって肝要な人物が現れる。それが、ジョン・フレッチャーであった。彼はスイス生まれ、ジュネーブで神学教育を終え、渡英し、英国国教会の司祭となり、その頃からウェスレーに惹かれて、60年代にはメソジストとなった神学者であった。このフレッチャーがウェスレーにアルミニウスを教えたと言われている。ウェスレーは1783年に75才でオランダを訪問し、さらに86年にも足を運んでいる²²。

ウェスレーはこの時期、積極的に論争を担うことを避け、もっぱらフレッチャー

がブリストルで始め、その働きへとウェスレーは駆り出された。だが、ホイットフィールドは改革派予定論の立場を採ったのに対して、ウェスレーはそれを拒否し、1740年代以降信仰復興運動は二つに、すなわちホイットフィールド率いるカルヴァン派とウェスレー率いるメソジストに分裂してしまう。ホイットフィールドの働きについては、拙論「18世紀英米リバイバル——ホイットフィールドとカルヴァン派メソジスト」『ウェスレー・メソジスト研究』(教文館、2011年)、3～20頁。

²² 詳しくは、*John Wesley and the Netherlands*, Johannes van den Berg and W. Stephen Gunter, Kingswood Books, 2012.

に任を託した。こうして、フレッチャーは *Check to Antinomians* というカルヴァン主義予定論を批判する膨大な書物を著し、この書物が後代のメソジストに深く浸透し、「ウェスレアン・アルミニアン神学」なるものが生まれていった。

さて、拙論・IIIで、今日のウェスレー研究家の中で最もアルミニウスに精通している W・ステファン・ガンター（デューク大学教授、ライデン大学で博士号）の主張を紹介したい。ガンターは、「アルミニウス（没1609年）からドルト会議（1618-1619）」において、レモンストラント派（アルミニウス主義）が徐々にアルミニウスの「全的墮落を基本とする人間論」をゆがめていった過程を説明している。1610年に没したアルミニウスを支持した43人の牧師によって厳格な予定論への抵抗を記した抗議書（レモンストランティア）が記された。そこにおいては、ライデン大学でアルミニウスの論敵ゴマールスが、アルミニウスに「ペラギウス主義」とレッテルを貼ったことに抗して、レモンストラント派は、アウグスティヌスの全的墮落の教理に立ち、人は自らを根拠として善を行うことはいっさいできず、善を行うためには神の恵みが先行することを説いた。しかし、アルミニウス没後のレモンストラント派は、8年の論争の中で、ゴマールスを中心とした反レモンストラント派が強烈な二重予定説を説けば説くほど、それに対抗意識を燃やして、反対方向、つまり原罪を語らず、人の自由意志を強調するようになっていったという。ガンターは次のように結論している。「もし反レモンストラント派がアルミニウスの棺を閉じたとしたら、レモンストラント派自身がその棺を地に埋め、その棺をペラギウスの雰囲気ですべて覆ってしまった」²³と。

過激な論争は、対極にあるものをますます引き離し、両者ともにさらに極端な論を展開することが多い。たとえば、改革派の予定論も挙げることができよう。スイス宗教改革全体の研究者として著名な出村彰は次のように述べている。

²³ W. Stephen Gunter, “From Arminius (d.1609) to the Synod of Dort (1618-1619),” *Perfecting Perfection: Essays in Honour of Henry D. Rack*, James Clarke & Co., 2016, 8-28. 引用は、p.28。ガンターは特に、ドルト会議でもレモンストラント派を代表していたシモン・エписコピウスが、墮罪・原罪について徐々に論調を弱めていった様子を説明している。

『キリスト教綱要』を始め、膨大な神学的著述や論文文書、聖書注解などを通して浮かび上がるカルヴァンの信仰の内実、あるいはその神学の「中心教義」を求め定めようとする努力が重ねられてきた。ことに 17 世紀のプロテスタント・スコラ学化に伴う論争の中で、予定論が「中枢教義」とされ、ドルト会議（1641）年において有名な TUIPI（完全堕落 Total Depravity・無条件の選び Unconditional Election・限定贖罪 Limited Atonement・不可抗的恩寵 Irresistible Grace・聖徒の堅忍 Perseverance of the Saints）の頭文字で表現されるような、「正統カルヴァン主義」が確立されたかに思われた。しかし今日では「予定論」、ことに「二重」予定がカルヴァン神学の重心ではないことで、研究者は一致していると言えよう。……『綱要』最終版では、予定論は……第三卷、キリスト者の自由（19章）、祈り（20）章の後に、ようやく「選び（予定）（21～24章）が取り上げられる²⁴。

カルヴァンの慎重な論調とは別に、後継者であったテオドール・ド・ベーズは予定論強化・硬化へと舵取る。カルヴァンが予定論の理論化をさけ、きわめて慎重に、聖書の枠内で取り扱っていたのに対して、ベーズの時代では、「神学大系の中で予定論の占める位置が大きくなり、単純化され、図式化される。神学が形式論理に即して整えられるようになり、したがって原理的とみなされた教理条項が、体系において先に取り扱われる」²⁵。その基本条項が「聖定」（*decretum*）である。これが予定の上位概念となり、永遠の聖定が教理の最も基本的なものとして扱われ、したがって堕落前予定が考えられるようになる。

さて、渡辺信夫は、こうした進展が、カルヴァンからベーズに至る論理的整理の結果ではなく、そこには論争の動力が働いたと分析している。「ジュネーブで予定論が

²⁴ 出村彰『総説 キリスト教史 2 宗教改革篇』（日本キリスト教団出版局、2006年）、124頁。1936年、カルヴァンの『キリスト教綱要』の初版が刊行されて400周年に出されたペーター・バルトの「カルヴァンの1536年のキリスト教綱要における予定説」以来、「予定説はカルヴァン神学の「中心教義」（*Zentraldogma*）と呼ばれるべきではない」との考えは、現代の改革派神学に一巻してきた（参考、北森嘉蔵『宗教改革の神学』（新教出版社、1984年）、213～229頁。

²⁵ 渡辺信夫『プロテスタント教理史』（キリスト新聞社2006年）、320頁。

強調されるようになったのは、反対論があり、反対派は、予定論を切り崩すことによって教理の全面的な否認ないし弱体化に至ろうとする自由思想家であったから、危険を予期したためであろう」²⁶。こうした経緯を見ると、論争のもたらす弊害を見るようである。すなわち、対抗論が出現して、その両者の論争を激化すると、もともと、二者の距離がそれほど遠くはなかったのに、相手を激しく批判して距離は広がっていくという現象である。

同じような現象を、先のガンターは、今度はメソジストの側に見いだしている。その論文のタイトルは、「ウェスレアン・アルミニアン神学におけるアルミニウスの欠如」²⁷である。

リバイバルが始まって最初の1745年で、ウェスレーは神と恵みの関係を以下のように明確にしていた。① すべての善きことは神の無代価の恵みに由来する、② その恵み以前に救いに向けての自由意志や力が、人に自然に備わっていることをまったく否定する、③ 神の恵みによって人が何を持っていようが何をしようが、人に功績はまったくない、こと。この点において、すなわち、神の働きに協調する力さえもこの原則は、その後も一貫して貫かれている。「神と共に働く」というまさにその力でさえ、神から来ている。それ故、神にのみすべての栄光を期すべきである」²⁸。アルミニウスもまた、同じ鮮さ、明確さをもって記している。「恵みなしには、自由意志がなんら真実で霊的な善をなしえることはない。それを始めることも達成することもない」²⁹。アルミニウスにとってもウェスレーにとっても、人が霊的なことに目覚めるためにも、感情や意志を神の御心に沿わせるためにも、先行する神の恵みの働きかけは不可欠である。

ところがガンターが指摘しているところによれば、「恵みによって自由にされた意

²⁶ 上掲書、321頁。

²⁷ W. Stephen Gunter, "The Loss of Arminius in Wesleyan-Arminian Theology," *Reconsidering Arminius: Beyond the Reformed and Wesleyan Divide*, ed., by Keith D. Stangline, Mark G. Bilby & Mark H. Mann, Kingswood Books, 2014, pp.71-90.

²⁸ Wesley, "Predestination Calmly Considered," *Works*, Jackson ed., 8:230.

²⁹ Arminius, "Grace and Free Will," in "Letter to Hippolytus," in *Writings*, 2:472.

志」(freed will)が、カルヴァン派との論争が激化するにつれ、単なる「自由意志」(free will)へと変化していったという。それは必ずしもフレッチャーの意図したことではなかった。しかし、ウェスレアン「神の救いの働きに信仰をもって応えることが求められ、さらに信仰はその真実性を良き業をもって証明しなければならない」という論理は、予定論を相手にした反論の中で、ウェスレアンは、いつしか原罪を根底とした人間論を語ることを止め、救いにおける人間的な役割が強調を協調しすぎる傾向に陥ったと言えよう。

特にフレッチャーは、カルヴァン派との予定論論争を背景にしていたため、救済論を描くときに、いつもカルヴァン派予定論の論理的な危険性を指摘し、救済論の全体が「対カルヴァン主義」という視点から記されている。米国メソジストは、その創設者をウェスレー、その神学者をフレッチャーとみなす傾向にあったので、いつしかメソジスト神学が「対カルヴァン主義予定論」の視点から描かれ、「神人協力説」的な表現が前面に出るようになってしまったことは残念である。それが「ウェスレアン・アルミニアン神学」であるとしたら、そこにはアルミニウスの墮罪論もウェスレーの原罪論は希薄になり、神の圧倒的な救いの働き以上に、人の良き業の強調が目立つようになっていた。

(インマヌエル高津教会牧師)